

異常歩行まとめ

跛行：外傷・その他の疾患により「正常歩行から逸脱」したもの

NO	歩行・跛行名	特徴	キーワードワード等
1	突進歩行	パーキンソン病では前かがみの姿勢になっているが、背中を後ろから軽くつくと、身体の重心が前へ移り、加速的に歩行が早くなる。 突進歩行といえばパーキンソン病ですが、突進歩行に加えて覚えるポイントがあります。 パーキンソン病の歩行について：パーキンソン病は、動きが遅くなる、手が震える、筋肉がこわばるなどの運動症状をはじめ、自律神経障害や睡眠障害など、さまざまな非運動症状が生じる病気。一般的に50歳以上で発症することが多く、その後は徐々に症状が進行。	前方突進 小刻み歩行 すくみ足歩行
2	痙性片麻痺歩行	脳血管障害などによる片麻痺に見られる。麻痺下側の下肢は硬直してごちなく動く片麻痺患者は麻痺側が硬直して動きにくいので、患側を動かす際に、股関節を中心にして半円を書くように歩きます。 片麻痺姿勢の特徴共同運動「一つの関節を動かすと色々な関節が動く」が起きて、「ウェルニッケ姿勢・肢位」をとる。	脳血管障害（片麻痺） 外転ぶんまわし運動 ぶんまわし歩行 草刈り歩行
3	痙性対麻痺歩行	脳血管障害などで両側の錐体路に障害がある場合、対麻痺が起きる。この場合、両膝が重なり合うようにして歩き、両側が内側に向けた足尖を交互に交差させながら爪先歩行を行う。	脳血管障害（対麻痺） はさみ脚歩行
4	失調性歩行	失調性疾患では円滑な運動ができないために、歩行が拙く、不確実な状態になる。 失調性歩行は大きく分けて2パターンあります。 一つは脊髄後根・後索障害で深部知覚の障害が発生したパターンです。 この場合、両下肢を開き、一步ごとに脚を高く上げて眼で足元を確かめながら脚を動かします。 理由は眼で確認しないと上がっているか不安だったり目で見えるところまで上げて確認してから歩きます。 一つは小脳性障害によるものです。頭部や体幹がふらふらと動揺してしまう千鳥足歩行を呈します。 小脳性によるものは眼で確認しても変化はありません。患側側によるめく事が多いとされている。	深部知覚障害 小脳障害 千鳥足歩行 酩酊歩行
5	鶏歩	腓骨神経の麻痺による尖足がある場合、脚を高く上げて足先を引きずるように歩行する。 総）腓骨神経の麻痺により、前脛骨筋の働きがなくなったために発生します。 足先自体は「尖足」という状態になります。	総腓骨神経麻痺 足先は尖足・下垂足
6	動揺性歩行	下肢を交互に骨盤ごと持ち上げ、状態を支持足側に大きく傾け左右にゆすりながら歩く、腹を突き出し、状態を後方にのけそらした腰椎前弯姿勢を取る。 動揺性歩行は別名アヒル歩行とも呼ばれています。下肢帯の筋力低下によって起こる歩き方動揺性歩行	進行性筋ジストロフィー 多発性筋炎 近位型脊髄性筋萎縮症 出題されるのは進行性筋ジストロフィーとアヒル歩行もしくはアヒル様歩行。注意：多発性筋炎も
7	ヒステリー性歩行	ヒステリー患者ではあたかも麻痺があるような歩行をする	
8	間欠性跛行	下肢に動脈硬化のある患者では歩行していると時々歩行できなくなる現象を言う イメージとしては局所的な酸欠状態のような感じです。どんどん主だるくなり休憩をはさみたくなります。	動脈硬化症 脊柱管狭窄症 バージャー病 ※間欠跛行には神経性・血管性がある注意
9	トレンドレンプルグ歩行	股関節の外転筋の筋力が低下するために股関節が不安定となつて跛行をきたす歩行である トレンドレンプルグ歩行について 患側下肢で体重を支えると健側の骨盤が下がる	墜落跛行 中殿筋麻痺 先天性股関節脱臼 変形性股関節症

10	疼痛性跛行	下肢に疼痛があると、罹患側の下肢は注意深く地面に付き、設置時間を短くして健側の下肢を素早く前に出して歩行する。 これは別名だけ覚えておいてください。	別名「逃避跛行」とも呼ばれています。
11	随意性跛行	周囲の人が注意すると正常に歩行するが、しばらくすると再び跛行が現れる現象である。 ヒステリー性跛行によく似ていますが、これは実際に何らかの原因があって跛行になります。 こどもに見られる疾患で股関節結核やペルテス病で見られます。	股関節結核 ペルテス病：小児期の大腿骨頭に発生した血行障害により骨頭の壊死が生じ、股関節に痛みを来す病気です。